

和歌（短歌）における句切れとその原因となった表現にかか
る最終的考察

浅岡純

朗

The very last sequence of my study
on the development of Kugire
& expressions in WAKA.

……………ASAOKA SUMIAKI

【ごあいさつ】

このたびは、U E Jジャーナルに拙稿を掲載くださり、深く感謝申し上げます。この論文は、古典和歌における文の構成とりわけ句の切れと続きにかかると表現技法として「句切れ」、「句の終わりに現れる接続助詞」に関して、これまで触れてきたものの最終的な考察を述べたものがあります。私もこの三月一日に満八十歳（男性の平均寿命）に達しました。そこで、この論述をもって、『生涯学習フォーラム』（第10巻、第1・2号合併号。紀尾井生涯学習研究会）以来九年にわたる、生涯学習

としての古典和歌研究の幕を閉じることと致しました。

一 老後の「生きがい」と生涯学習

生涯学習については、『週刊 年金実務』（社会保険実務研究所）の紙上で、子ども時代の「学びがい」、成年時代の「働きがい」に並ぶ三番目の甲斐として老後の「生きがい」を挙げ、その中核をなすものが「生涯学習」であると述べました。この考え方は今も正しかったと思っています。

二 「和歌（短歌）における句切れとその原因となった表現にかかると最終的考察」（要旨）

（一）これまで、和歌（短歌）における文の構成上、重要な役割を果たす「句の切れと続き」について、表現技法としての「句切れ」と「句の終わりに現れる接続助詞」とを取り上げ、その相互の関係や歌風への影響などについて述べてきたところ

（二）この論考では、①初句切れ、三句切れが万葉短歌以後新古今短歌までいかなる表現を原因として増え続けたかにつき初出歌を追うことにより、②二句切れが古今短歌以後新古今短歌まで、四句切れが古今短歌以後、拾遺・後拾遺短歌まで減り続ける中で、いかなる表現を残し得たかにつき「頻出歌」を追うことによって、それぞれ明らかにしようと試みた。

（三）その結果、①初句切れ、三句切れにあつては、呼びかけ↓短文↓倒置という簡潔な表現から複雑な表現に向かって増え続けたこと、②二句切れ、四句切れにあつては、複雑な内容を盛り込み、意外性を強調できる「短文表現」を残しつつ、前記①と同様の順序で減り続けたことが

明らかになった。

【本論】

はじめに

これまで、和歌（短歌）における文の構成で重要な役割を果たす句の切れと続きについて、表現技法としての「句切れ」と「句の終わりに現われる接続助詞」とを取り上げ、その相関性や歌風への影響などについて述べてきた(8)(9)が、今回は、句切れとその原因となった表現との関係を取り上げてみたい。

(一) 句切れの展開

和歌（短歌）の表現技法の一つである「句切れ」は、

「複数の文からなる短歌で、結句（第五句）以外の何句目で文が終わっているかを示すもの。その位置によって、初句切れ・

二句切れ・三句切れ、四句切れという。『万葉集』の時代では、

二句切れ・四句切れが、『古今和歌集』の時代は三句切れが、『新古今和歌集』の時代は初句切れ・三句切れが、比較的多い。」(1)

とある。句切れの大数的観察からすると、この指摘はおおむね妥当ではあるが、それらの句切れがいかなる表現を原因として生じたのかは、あまり明らかにされていない。例えば『万葉集』の時代において二句切れ、四句切れが頻用されたことはまちがいない

が、初句切れや三句切れも少数ながら用いられていた。次の二首は、詠歌年代が判明している最古の三句・四句切れ、初句・二句切れである。

・かむなびの いはせの もりの よぶこどり（ヨ）／いたくななきそ／あがこひまさる（巻八・春雑歌・一四一九・鏡王女・天智（六六一〜六七一）未詳）

・ほととぎす（ヨ）／いたくななきそ／ながこゑを さつき
のたまに あへぬくまでに（巻八・夏雑歌・一四六五・藤原夫人・天武（六七二〜六八六）未詳）

(二) 句切れの原因となった表現

いったいに、和歌の一般的なあり方が、自然の発想のままの順序どおりに句切れなしに表現すること（表1。句切れの発現率約10%、よって無句切れが90%）だとすると、句切れは、ともすれば和歌表現の流れを切れ切れにしかねない。にもかかわらず、この技法を選ぶからには、それなりの理由・効果がなくてはならない。このことについて、

「要するに、句切れが生ずる原因は
一 名実ともに、倒置法的表現をとった場合

二 呼びかけの表現がなされる場合

三 繰り返しに、同一または相等的な語句が用いられる場合の三つに絞って考えることができる」

と看破したのは松田武夫氏(2)であり、句切れの効果についても、「句切れの原因を、倒置・呼びかけ・繰り返しの三点に求め、

そうした原因から生じた句切れの部分は、等しなみに強調される共通性を有する」

と結論づけている。

しかしながら、大まかにいって、まず「倒置」は時代によって「句切れの位置」は変わっても句切れの総数に占める割合は約三五%〜四〇%、次に「呼びかけ」は約一〇%〜一五%とあまり変化がないが、「繰り返し」はこれが盛んに用いられたとされる『万葉集』の時代でも二%程度に過ぎない。そうすると、『万葉集』の時代から『新古今和歌集』の時代に至る句切れの展開は、松田論文という「倒置・呼びかけ・繰り返しの三点」以外にも、原因となる表現を想定する必要がでてくる。今ここに、「倒置表現」の二首がある。

・くやしかも／ かくしらませば あをによし くぬちことごと
みせましものを（万葉巻五・雑歌・七九七・山上憶良・神亀五
（七二八年）

・やまとはは なきてかくらむ／ よぶこどり きさのなかやま
よびぞこゆなる（万葉巻一・雑歌・七〇・高市連黒人）

同じ倒置表現でも、前者は一首の結論たる述部が初句に倒置されたもの、後者は一首のうちの句単位の短文（文法的には短文）の述部が第二句に倒置されたものである。また、内容は呼びかけであっても、表現形式は「倒置表現」に分類すべき次のような一首もある。

・いもがため われたまひりぬ／ おきへなる たまよせもちこ

／ おきつしらなみ（万葉巻九・雑歌・一六六五・作者未詳）

さらに、二句・四句切れで、最古の「繰り返し表現」がある。

・われはもや やすみこえたり／ みなひとの えかてにすとい
ふ／ やすみこえたり（万葉巻二・相聞・九五・藤原鎌足・天智未詳）

他方、倒置でも呼びかけでも繰り返しでもない最古の二句切れの表現がある。

・わがせこは かりいほつくらす／ かやなくは こまつがしたの
かやをからさね（万葉巻一・雑歌・一一・中皇命・斉明四（六五八）年）

前者は「やすみこえたり」の「繰り返し表現」でよいが、後者は文の構成からすれば「わが背子は仮慮作らす」という主述の整った短文であって、この種の表現は、万葉短歌の句切れの半数近くを占めている。すなわち、前者の「（私は）安見子得たり」を後者と同一短文表現の一環とみなせば、松田論文にいう繰り返しは、「繰り返し表現改メ短文表現」としてくることができ。これらの検討結果を整理し、松田論文にいう①倒置表現の下位区分として「長文・倒置表現」及び「短文・倒置表現」、②呼びかけ表現の下位区分として「呼びかけ・倒置表現」、③繰り返し改メ短文表現の下位区分として「短文・省略表現」を加え表1及び2の区間を確定した。

この論考では、『万葉集』の短歌形式の和歌（以下「万葉短歌」という）四一八九首のうち詠歌年代が明らかでない二〇九五首、『古今

和歌集』の短歌形式の和歌（以下「古今短歌」という）一〇九一首、『拾遺和歌集』及び『後拾遺和歌集』の短歌形式の和歌（以下「拾遺・後拾遺短歌」という）二五五四首、『新古今和歌集』の和歌（以下「新古今短歌」という）一九七八首をテキスト③として取りまとめた。それぞれの短歌に存在する句切れの位置、その原因となった表現との相関的分布が示唆するところを基礎に、①『万葉集』以後いかなる表現を原因として初句切れ、三句切れが生じ、かつ、増加したのか、②『古今和歌集』以後いかなる表現が二句切れ、四句切れの減少にもかかわらず生き残り、増加し続けたのか、の両面について、紙数の許すかぎり詳細に述べたいと思う。

(一) 万葉短歌の初句切れ、三句切れと初出表現

万葉短歌のうち詠歌年代が明らかでない二〇九五首に存在する句切れ八三五回の多くは二句切れ、四句切れで七二六回・八七%に上るが、初句切れ、三句切れも一〇九回・一三%を占める。以後の時代に向け、初句切れ、三句切れが増加することを想定し、その初出歌を把握することによって、万葉短歌の初句切れや三句切れがいかなる表現を原因として生じたのが判明するであろう。

「はじめに」で前出したように、万葉短歌の初句切れ、三句切れのうち最古の初出歌は、三句切れの呼びかけ表現であり、次に現われたのは初句切れの呼びかけ表現であった。このことは、呼びかけ表現こそが初句切れや三句切れに相応しい表現として真っ先に着想されたことを意味する。しかし、その呼びかけ表現にしても呼びかけの相手方（対象）を省略したり、呼びかけの述部を

倒置したりする表現は、万葉第四期・天平一一（七三九）年の巫部麻蘇娘子歌（巻八・秋相聞・一六二二）、古今短歌の六歌仙時代の三國町歌まで待つ必要があったのである。

次に古い初出歌は、三句切れの短文表現であった。

・かはのへの ゆついはむらに くさむさず／つねにもがもな／とこをとめにて（巻一・雑歌・二二・吹黄刀自・天武四（六七五）年）

・おくれゐて こひつつあらずは （私八）おひしかむ／みちのくまみに しめゆへわがせ（巻二・相聞・一一五・但馬皇女・持統年次（六八六～六九七）未詳）

前者は主述の整った短文表現、後者は主部を欠いた「短文・省略表現」とでも呼ぶべきものである。これらが初句切れの表現として現われるのは万葉第三期・和銅四（七一一）～天平五（七三三）年に入ってからのことである。

・つくよよし／かはのおときよし／いざここに ゆくもゆかぬも あそびてゆかむ（巻四・相聞・五七一・大伴四調・天平二（七三〇）年）

・（酒ヲ飲マナイ人ハ）あなみにく／さかしらをすと さけのまぬ ひとをよくみば さるにかもにむ（前出）

最後に、「倒置表現」の初出歌も三句切れ、初句切れの順で現われた。

・わがいのちし まさきくあらば またもみむ／しがのおほつに
よするしらなみ（ヲ）（巻三・雑歌・二八八・穂積朝臣老・養老

六（七二二）年

・くやしかも／ かくしらませば あをによし くぬちことごと
みせましものを（前出）

なお、万葉短歌の二句切れ、四句切れについては、句切れ及びその原因となった表現のすべてが万葉第二期（天武二（六七三）〜和銅三（七一〇）年）までに初出しているが、紙数の都合もあり、詳細は別の機会に譲りたい。

（二）古今短歌の初句切れ、三句切れと初出表現

古今短歌一〇九一首に存在する句切れ四六一回のうち、依然として二句切れ、四句切れが二七九回・六一%を占めるが、初句切れ、三句切れも一八二回・三九%を占めるまでに増加してきた。万葉短歌で初出を見ず、古今短歌でようやく初出を見た初句切れ、三句切れに、次の三首がある。

・やよやまで／ 山郭公（ヨ）／ 事づてむ／ 我世中にすみわ
びぬとよ（卷三・夏歌・一五二・みくにのまち・六歌仙時代（嘉
祥三〜寛平二）年・八五〇〜八九〇年・年代不明）

・今ぞ知る／ くるしき物と／ 人またむさとをばかれずとふべ
かりけり（卷一八・雑歌下・九六九・なりひら朝臣・六歌仙時代
（前出）・年代不明）

・わすれては夢かと思ふ／おもひきや／雪ふみわけて君を見む
とは（卷一八・雑歌下・九七〇・なりひらの朝臣・貞観一五（八
七三）年）

一首目「やよやまで」は初句切れの「呼びかけ・倒置表現」、二首

目「今ぞ知る」は初句切れの「短文・倒置表現」、三首目「おもひ
きや」は三句切れの「短文・倒置表現」である。

初出歌から見た初句切れ、三句切れとその原因となった表現との関係を整理すると、①句切れの発生では、倒置・呼びかけ・繰り返し改メ短文の三つの表現ともに、まず三句切れで試みられてから初句切れに移ること、②句切れの原因となる表現は、呼びかけ↓繰り返し改メ短文↓倒置の順で現われること、が明らかとなった。とくに、初句切れについては初句が五音という窮屈な表現を強いられることから、⑦呼びかけという簡潔かつ率直な表現が好まれたこと、④短文や倒置という複雑かつ技巧的な表現は三句切れでいったん試されてから初句切れに用いられたこと、⑤万葉短歌の初句切れは一九回中一二回、古今短歌にあつては二〇回中八回も二句切れを伴っていること、さらには、⑥初句切れでも三句切れでもその原因となる呼びかけ・短文・倒置という基本的な表現に、倒置や省略といった下位区分の表現要素が加味されるま
でにかなり長い時間を要したこと、なども判明している（表2）。

二 二句切れ、四句切れでも句切れの原因となり続けた表現
（一）「頻出表現」の定義

この論考における用語の定義として「頻出表現」とは、古今短歌以後減り続ける二句切れ、四句切れの和歌（短歌）のうち生き残って増加する表現をいい、その表現が頻出するか否かの判断指標は、①当代における当該句切れの割合を一〇〇としたときのその句切れの原因の割合が前代における割合に比較して増加（相対

的寄与度がプラス)、②当代における句切れの総数(句切れ計)を一〇〇としたときの当該句切れの原因の割合が前代における割合に比較して増加(絶対的寄与度がプラス)のいずれをも満足した場合を「頻出」(例歌の巻数・歌番号で表示)、そのいずれも減少した場合を「減少」とし、それ以外は斜線で表示した(表2)。

(二) 古今短歌の二句切れ、四句切れの頻出表現

古今短歌の二句切れは、万葉短歌の三六五回・四四%から、一九九回・四三%に微減したが、句切れの原因となった表現はおおむね増加し、減少は「短文表現」に限られた。

・いざさくら(ヨ) / 我もちりなむ / ひとさかりありなば人にうきめ見えなむ(巻二・春歌下・七七・そうく法し・呼びかけ表現)

・名にしおはばいざ事とはむ / 宮こどり(ヨ) / わが思ふ人はありやなしやと(巻九・羈旅歌・四一一・在原業平朝臣・呼びかけ・倒置表現)

・梅花それとも見えず / 久方のあまぎる雪のなべてふれば(巻六・冬歌・三三四・よみ人しらず・長文・倒置表現)

・我のみぞかなしかりける / ひこぼしもあはですぐせる年しなれば(巻一二・恋歌二・六一二・みつね・短文・倒置表現)

・(才郎ガ)うちつけにさびしくもあるか / もみぢばもぬしなきやどは色なかりけり(巻一六・哀傷歌・八四八・近院右のおほいまうちぎみ↓源能有・短文・省略表現)

また、四句切れは、万葉短歌の三六一回・四三%から八〇回・一

八%に激減し、それにつれて多くの表現も減少したが、「長文・倒置表現」、「呼びかけ表現」に限っては増加した。

・秋なれば山とよむまでなくしかに我おとらめや / ひとりぬるよは(巻一二・恋歌二・五八二・よみ人しらず・長文・倒置表現)

・みな人は花の衣になりぬなり / こけのたもとよ / かわきだにせよ(巻一六・哀傷歌・八四七・僧正遍照・呼びかけ表現)

このことから、句切れの減少につれて減少する表現に対し、句切れの減少にもかかわらず生き残り増え続ける表現は、最も複雑かつ技巧性の高い表現であり、したがって意外性や強調性の濃厚な表現とみることができ。

(三) 拾遺・後拾遺短歌の二句切れ、四句切れの頻出表現

一般に、和歌(短歌)表現の様式を「歌風」といい、和歌史における万葉・古今・新古今の独自性を認め、三歌集の歌風の相違を互いに他との比較によって論じたのは、近世中期の契沖『万葉代匠記惣釈』に始まったとされるが、万葉調から古今調への間には大きな歌集(例えば勅撰和歌集)がなく、内容で比較するほかない。古今調から新古今調への転換点には拾遺短歌、後拾遺短歌が存在する。先行研究として、①語彙史の立場から『拾遺和歌集』を転換点とする西端幸雄氏(4)や上野理氏(5)、②『拾遺和歌集』を「三代集の達成」、「古今的世界の終結」とみなす小町谷照彦氏(6)、菊地靖彦氏(7)らがあるが、①大数的観察からすると初句切れ、三句切れが句切れの五三%、二句切れ、四句切れが四七%となる『拾遺和歌集』が、②各句切れの構成比の変動からすると初句切れ、

三句切れが句切れの六二%、二句切れ、四句切れが三八%となる『後拾遺和歌集』が転換点として視野に入る。そこで、拾遺短歌・

後拾遺短歌をひとくくりにして「転換期の短歌ないし歌風」とみなすこととした。転換期においても初句切れ、三句切れは増え続け、二句切れ、四句切れは減り続けた。それらの句切れの原因となった表現はもつと複雑な動勢を示した。増え続ける句切れのうちにあっても「呼びかけ表現」や「短文表現」は早くも減少に転じたし、逆に、減り続ける句切れにあっても「長文・倒置表現」や「短文・倒置」、「短文・省略」の表現は引き続き増加した。・こころあらむ人にみせばや／ つのくにのなにはわたりのはるのけしきを（後拾遺第一・春上・四三・能因法師・長文・倒置表現）

・野辺見れば（皆ガ）わかなつみけり／むべしこそかきねの草もはるめきにけり（拾遺卷一・春・一九・つらゆき・短文・省略表現）

・あかずのみおもほえむをばいかがせん／かくこそは見め／秋のよの月（ヲ）（拾遺卷三・秋・一七四・もとすけ・短文・倒置表現）

・うきままにいとひし身こそをしまるれ／（命ガ）あればぞみける／あきのよのつき（後拾遺第四・秋上・二六三・藤原隆成・短文・省略表現）

・（私ハ）わがせこをこふるもくるし／いとまあらばひろひてゆかむ／恋忘がひ（ヲ）（拾遺卷一九・雑恋・一二四五・坂上娘女・

二句切れ短文・省略表現及び四句切れ短文・倒置表現

（四）新古今短歌の二句切れ、四句切れの頻出表現

新古今短歌一九七八首に存在する句切れ八四一回のうち、初句切れ、三句切れは五二五回・六二%、二句切れはさらに減って一七五回・二一%、四句切れはやや増えて一四一回・一七%となった。新古今短歌における頻出歌は、①二句切れは句切れとしては減りつつも、その原因となった表現のうち、「長文・倒置」、「短文・省略」の二つの表現は、なおも増え続け、②四句切れは句切れとしてやや持ち直し「呼びかけ・倒置」、「短文・倒置」、「短文・省略」のいずれの表現も敏感に反応・増加した。

・いづれをか花ともわかむ／故郷のかすがの原にまだ消えぬ雪（ハ）（卷一・春歌上・二二一・凡河内躬恒・長文・倒置表現）

・（私ハ）かくてこそ見まくほしけれ／万代をかけてにほへる藤浪の花（ヨ）（卷二・春歌下・一六三・醍醐天皇・短文・省略表現）

・みるめかる方やいづくぞ／さをさしてわれにをしへよ／あまのつり舟（ヨ）（卷一一・恋歌一・一〇八〇・業平朝臣・呼びかけ・倒置表現）

・ささのにはみやまもそよにみだるなり／我はいもおもふ／別れきぬれば（卷一〇・羈旅歌・九〇〇・人麿・短文・倒置表現）

おわりに

繰り返すが、この論考は、和歌（短歌）の句切れがいつどのよに現われ、いかなる展開をたどったかというところからさらに歩を進め、句切れがいかなる表現を原因として生じたかを分析・

検討したものである。

(一) 松田論文の補正

句切れがなぜ生じたかについて、松田論文は、倒置、呼びかけ、繰り返しなどの三表現を成因としたが、倒置、呼びかけはともかく、①繰り返し表現は盛んに用いられた万葉短歌でも句切れの二％程度に過ぎず、繰り返し表現の区分を少し広い概念の句単位の短文（文法的には短文）という表現区分に改定した、②多数のデータを網羅するため、倒置・呼びかけ・繰り返し改メ短文の三つの表現の下位区分に「呼びかけ・倒置」、「長文・倒置」、「短文・倒置」、「短文・省略」などを追加した。

(二) 「増える句切れ」の初出歌に見る表現

万葉短歌のうち詠歌年代が明らかな二〇九五首に存在する初句切れ、三句切れは一〇九回・一三％を数える。これを起点に、「増える句切れ」としての初句切れ、三句切れとその原因となった表現を「初出歌」という形で抽出したところ、万葉短歌ではついに出現せず古今短歌まで発現を待つこととなった表現に、「呼びかけ・倒置」、「短文・倒置」の二区分があることが明らかになった。

(三) 「減る句切れ」の頻出歌に見る表現

万葉短歌のうち詠歌年代が明らかな二〇九五首に存在する二句切れ、四句切れは七二六回・八七％を数えた。これを起点に、古今短歌以後、二句切れにあつては新古今短歌の一七五回・二一％まで、四句切れにあつては拾遺・後拾遺短歌の九九回・一〇％まで減り続けたが、この「減る句切れ」の原因となった表現のうち

にあつてなおも増え続けた表現を「頻出歌」という形で抽出したところ、①減り続ける二句切れにあつて、古今短歌、拾遺・後拾遺短歌、新古今短歌に至るまで一貫して増え続けた表現は「長文・倒置」、「短文・省略」の二区分、②減り続ける四句切れにあつて、古今短歌では減少したものの、拾遺・後拾遺短歌で再び増加に転じた表現に「短文・倒置」、「短文・省略」の二区分があることが明らかになった。

(四) まとめ——句切れと表現との関係

要するに、和歌（短歌）の句切れとその原因となった表現との関係について、ひとまず次のように総括することができよう。

①和歌（短歌）に存在する句切れの割合（正確には、短歌における結句（第五句）以外の句の総数に占める句切れの総数の割合をいう）はたかだか一〇％程度にすぎず、短歌の文の一般的な語序は、自然の発想のままの順序どおりに句切れなしに表現されること、そうすると、②和歌（短歌）の句切れは、一般的な日本語の語序からは得られない意外性や強調性などをねらいとして技巧的に導かれたものであつて、

③「増える句切れ」の初出歌の表現が呼びかけ↓短文↓倒置の順で発生するのは、単純な表現から複雑な表現に向かう動機を、

④「減る句切れ」の頻出歌の表現が、初出歌と同様の順で減少しつつ、「短文・倒置」、「短文・省略」の表現に限って増え続けるのは、「減る句切れ」にあつても複雑な表現を保持したいという動機（表2）をそれぞれ示唆していると考えられるのである。

(注)

1 山口堯一・鈴木日出男編『全訳全解古語辞典』平成一六・一〇・文英堂

2 松田武夫「修辞法の再検討」『月刊文法』昭和四四・二・明治書院

3 テクスト

(1) 万葉短歌については『新編国歌大観』第二卷(昭和五九・三・角川書店)の四一八九首のうち詠歌年代が明らかかな二〇九五首(土屋文明編『萬葉集年表』第二版(昭和五九・三・岩波書店)による。

(2) 「古今短歌」、「拾遺短歌」、「後拾遺短歌」、「新古今短歌」については『新編国歌大観』第一卷(昭和五八・三・角川書店)による。

4 西端幸雄「語彙史の立場から見た『拾遺和歌集』—使用語句の性格を統計的に見る—」『国語語彙史の研究』14『平成六・八・和泉書店

5 上野理『後拾遺集前後』昭和五一・四 笠間書院

6 小町谷照彦校注・新日本古典文学大系7『拾遺和歌集』平成二・一・岩波書店・「解説」

7 菊地靖彦『古今的世界の研究』昭和五五・一一・笠間書院

8 拙稿「和歌における文の構成—「増える三句切れ」と「減る四句切れ」の展開と相関—に関する一考察」(『解釈』九・一〇

月号(第六一卷)』解釈学会

9 拙稿「和歌の句の終わりに現われる接続助詞—「ば」から「て・して」への変遷—」(『解釈』九・一〇月号(第五九卷)』解釈学会

表1 和歌(短歌)の句切れに見る表現別増減(実数・構成比)

短歌区分	表現区分	呼びかけ表現		倒置表現		繰り返し表現→短文表現		合計	句切れの発現率(%)
	表現区分の下位区分	呼びかけ	呼びかけ・倒置	長文・倒置	短文・倒置	短文	短文・省略		
	下位区分の説明 句切れ区分	呼びかけの対象	呼びかけの述部の倒置・対象の省略	長文の述部の倒置	短文の述部の倒置	単文	短文の成分の省略・その他		
万葉短歌	初句切れ A	(1) (47) 9	(-) (-) -	(0) (16) 3	(-) (-) -	(1) (26) 5	(0) (11) 2	(2) (100) 19	835/2095×4 ×100≒10
	三句切れ C	(2) (14) 13	(1) (7) 6	(3) (27) 24	(-) (-) -	(5) (49) 44	(0) (3) 3	(11) (100) 90	
	A+C	(3) (20) 22	(1) (5) 6	(3) (25) 27	(-) (-) -	(6) (45) 49	(0) (5) 5	(13) (100) 109	
	二句切れ B	(2) (5) 18	(1) (2) 6	(4) (8) 30	(0) (1) 4	(29) (66) 241	(8) (18) 66	(44) (100) 365	
	四句切れ D	(1) (1) 5	(4) (11) 38	(5) (11) 41	(20) (46) 167	(10) (24) 86	(3) (7) 24	(43) (100) 361	
	B+D	(3) (3) 23	(5) (6) 44	(9) (10) 71	(20) (24) 171	(39) (45) 327	(11) (12) 90	(87) (100) 726	
	句切れ計 A+B+C+D	(5) 45	(6) 50	(12) 98	(21) 171	(45) 376	(11) 95	(100) 835	
古今短歌	初句切れ A	(2) (35) 7	(0) (5) 1	(1) (20) 4	(-) (-) -	(1) (30) 6	(0) (10) 2	(4) (100) 20	461/1091×4 ×100≒11
	三句切れ C	(2) (6) 9	(1) (4) 6	(7) (19) 31	(1) (2) 4	(22) (62) 101	(2) (7) 11	(35) (100) 162	
	A+C	(3) (9) 16	(1) (4) 7	(8) (19) 35	(1) (2) 4	(23) (59) 107	(3) (7) 13	(39) (100) 182	
	二句切れ B	(3) (6) 13	(3) (6) 13	(6) (13) 27	(5) (11) 22	(16) (38) 75	(10) (25) 49	(43) (100) 199	
	四句切れ D	(0) (2) 2	(2) (9) 7	(10) (59) 47	(1) (5) 4	(4) (21) 17	(1) (4) 3	(18) (100) 80	
	B+D	(3) (5) 15	(5) (7) 20	(16) (27) 74	(6) (9) 26	(20) (33) 92	(11) (19) 52	(61) (100) 279	
	句切れ計 A+B+C+D	(7) 31	(6) 27	(24) 109	(6) 30	(43) 199	(14) 65	(100) 461	
拾遺・後拾遺短歌	初句切れ A	(1) (9) 9	(2) (20) 20	(3) (31) 30	(0) (6) 6	(1) (9) 9	(2) (25) 25	(9) (100) 99	[1055] [2554] 509+546/(1336+1218)×4 ×100≒10
	三句切れ C	(2) (4) 21	(2) (4) 22	(8) (16) 82	(3) (6) 31	(23) (49) 246	(10) (21) 105	(48) (100) 507	
	A+C	(3) (5) 30	(4) (7) 42	(11) (19) 112	(3) (6) 37	(24) (42) 255	(12) (21) 130	(57) (100) 606	
	二句切れ B	(1) (3) 9	(2) (5) 19	(6) (20) 70	(3) (9) 33	(10) (29) 102	(11) (34) 117	(33) (100) 350	
	四句切れ D	(0) (3) 3	(2) (14) 14	(3) (29) 28	(2) (21) 21	(2) (14) 14	(2) (19) 19	(10) (100) 99	
	B+D	(1) (3) 12	(3) (7) 33	(10) (22) 98	(5) (12) 54	(11) (26) 116	(13) (30) 136	(43) (100) 449	
	句切れ計 A+B+C+D	(4) 42	(7) 75	(20) 210	(9) 91	(35) 371	(25) 266	(100) 1055	
新古今短歌	初句切れ A	(1) (7) 7	(2) (21) 22	(4) (30) 31	(0) (1) 1	(1) (11) 12	(4) (30) 31	(12) (100) 104	841/1978×4 ×100≒11
	三句切れ C	(2) (4) 16	(3) (5) 23	(10) (19) 81	(1) (2) 7	(25) (52) 218	(9) (18) 76	(50) (100) 421	
	A+C	(3) (4) 23	(5) (9) 45	(13) (21) 112	(1) (2) 8	(27) (44) 230	(13) (20) 107	(62) (100) 525	
	二句切れ B	(1) (4) 7	(2) (8) 15	(6) (27) 47	(0) (2) 3	(8) (39) 68	(4) (20) 35	(21) (100) 175	
	四句切れ D	(1) (3) 5	(4) (25) 35	(5) (33) 47	(3) (16) 22	(3) (16) 22	(1) (7) 10	(17) (100) 141	
	B+D	(2) (4) 12	(6) (16) 50	(11) (30) 94	(3) (88) 25	(11) (28) 90	(5) (14) 45	(38) (100) 316	
	句切れ計 A+B+C+D	(4) 35	(11) 95	(25) 206	(4) 33	(38) 320	(18) 152	(100) 841	

注1 上表中「長文」は、短歌1首の長さの文を、「短文」は1句以上4句以下の長さの文をいう。

2 上表中「合計」欄のアミカケは、万葉短歌、古今短歌、新古今短歌への転換期に相当する拾遺・後拾遺短歌の合計、新古今短歌における初句切れ、三句切れの合計比(%)と二句切れ、四句切れの合計比(%)を示す。

表2 和歌(短歌)の句切れに見る初出表現と頻出表現

歌風区分	短歌区分	初出・頻出区分	表現区分 表現区分の下位区分 下位区分の説明 句切れ区分	呼びかけ表現		倒置表現		繰り返し表現→短文表現		年代順・時期区分表			
				呼びかけ	呼びかけ・倒置	長文・倒置	短文・倒置	短文	短文・省略	(西暦)	(和暦)		
				呼びかけの対象	呼びかけの述部の倒置・対象の省略	長文の述部の倒置(主部の省略)	短文の述部の倒置(主部の省略)	単文	短文の成分の省略・その他				
万葉歌風	万葉短歌	初出	初句切れ	8-1465							I	~672	~天武元
				6-957		5-797		4-571	3-344	II	673 ~710	天武2 ~和銅3	
				8-1419						III	711 ~733	和銅4 ~天平5	
			2-172 1-68		3-288		8-1562	4-748	IV	734 ~759	天平6 ~天平宝字3		
			8-1621						I		(省略)	(省略)	
									II				
		頻出	二句切れ	(8-1465) 1-73	3-263	3-238	1-70	2-85 1-11	2-87	I		(省略)	(省略)
					9-1665 1-4	4-486		1-8	2-85	II			
				(2-172)	4-491			3-256 2-163	1-28	I			
									II				
			四句切れ								III		
											IV		
古今歌風	古今短歌	初出	初句切れ							上代	760 ~808	天平宝字4 ~大同3	
					3-152		18-969		(8-377)	評入 しらす	809 ~849	大同4 ~嘉祥2	
			三句切れ						六歌 仙	850 ~890	嘉祥3 ~寛平2		
		頻出	初句切れ	A	7-349	(3-152)	18-961			減少			
				C	減少	減少		(18-970)	3-135	13-657			
				A+C	減少	減少			1-10	(18-984)			
			二句切れ	B	2-77	9-411	6-334	12-618	減少	16-848			
				D	16-847	減少	12-582	減少	減少	減少			
				B+D	19-1012	5-285		減少	減少	13-667			
		頻出	二句切れ	A	減少	後拾1-2	拾12-771	拾1-36	減少	後拾1-79			
				C	減少	後拾1-107	後拾1-20	拾3-177		拾1-54			
				A+C	減少	拾2-117	後拾1-90	拾7-385		拾12-749			
四句切れ	B		減少	減少	後拾1-43	減少	減少	拾1-19					
	D				減少	拾3-174	減少	後拾4-263					
	B+D		減少	減少	減少		減少	拾19-1245					
頻出	初句切れ	A	減少	8-822	3-190	4-336	減少	9-858					
		C	減少	17-1626	15-1405	1-41		17-1591					
		A+C	減少	1-51	15-1388	1-41		18-1807					
	二句切れ	B	減少	減少	1-22	減少	減少	2-163					
		D	減少	11-1080	減少	10-900	減少	13-1213					
		B+D	2-150	減少	減少		減少	5-447					

注 1 上表中「長文」とは、短歌1首の長さのひと続きの文を、「短文」とは短歌の1句以上4句以下の長さの文をいう。
 2 上表中「初出」欄及び「頻出」欄の「数字-数字」は、当該歌の「巻数-歌番号」を示す。
 また、各欄の上段は2回以上の句切れを有する一首、下段は1回の句切れを有する一首を示す。
 3 上表中「頻出」欄の「減少」は、例えば万葉短歌に対する古今短歌において、表1「和歌(短歌)」の句切れに見る表現増減の
 ①各句切れの「合計」を100とした場合の表現別構成比、②「句切れ計」の「合計」を100とした場合の各句切れの表現別構成比のいずれも減少した場合を、
 「斜線」はいずれか一方が減少していない場合を示す。
 4 上表中「万葉短歌」の「年代順」は、針原孝之、山崎正之、雨海博洋、神作光一著『資料日本文学史 上代中古編』(昭和51. 3. 桜楓社)による。
 5 上表中「古今短歌」の「時期区分等」は、小沢正夫編著『作者別年代順古今和歌集 増補版』(平成2. 9. 明治書院)「古今集歌調の展開」による。

浅岡純朗（あさおか・すみあき）

特定非営利活動法人全日本大学開放推進機構監事・東京都社会保険労務士会千代田統括支部副支部長・昭和45年東京都立大学（現首都大学東京）人文学部卒業。厚生省（現厚生労働省）社会保険庁退職後、全国国民年金福祉協会連合会などを経て、平成15年から現職。平成23年二松学舎大学大学院文学研究科国文学専攻・博士後期課程単位取得退学。